
悪魔の微笑み

黒い人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の微笑み

【Nコード】

N0885E

【作者名】

黒い人形

【あらすじ】

夜明け前の静かな時間が好きだった。だが、世間を騒がす連続殺人事件によって、それは奪われてしまう。毎日のように鳴り響くサイレンの音。はっきり言って迷惑なのだが、自分でどうこう出来る問題でも無い。だがある日、それをどうにか出来るだけの力を、手に入れる事になる。

第1話：出会い

君は神様っていうのを信じるかい。

俺はいると思っている。

ただ、救いを与えてくれるようなモノがいてると思っている訳ではない。

それなら神とはどんな存在なのだろうか。

俺の中での神とは、この世界を創造した存在だ。

神がこの世界を創造する前は、何もなく、ただ無が広がっていただけだ。

無の中にいた神は、ひどく孤独だっただろう。

孤独だった神は、世界を創造した。

最初に創られたのは美しい世界。

しかし、そこにあるどんな風景も心を動かすことはなかった。

次に創られたのは醜い世界。

しかし、結果は同じだった。

今度は、そこに住む住人を創った。

美しい世界には、理性によって動く者たちを。

醜い世界には、感情によって動く者たちを。

しかし彼らもまた、孤独を癒してはくれなかった。

自分が創りだした者たちには、自分の想像を超える力はないのだ。

神は最後に、この世界を創った。

不完全で未熟な世界。

変化を続け、成長する世界に、神は可能性を見出だした。

いつか、遠い未来。

永遠に続く、その孤独から救ってくれる存在が生まれる事を。

真っ暗な部屋の窓から町を見下ろす。

正直を言えば、神がいるかどうかに興味は無い。

ただ単に、思考する事が趣味なだけだ。

他に理由があるとすれば、救いを与えてくれる存在なんて無いと、諦める理由

が欲しかっただけかもしれない。

世界には理不尽な事が満ちている。

叶わぬ希望を下手に持つよりも、最初から何も期待しない方が楽だ。

もっと現実的な、自分の幸せというものを考えるべきだ。

静まりかえった町を眺めていると、穏やかな気持ちになれる。

俺は夜明け前のこの時間が好きだった。

時が止まってしまったような世界。

この静寂こそが癒しだったのだが、最近は何れすらも邪魔される事が多い。

「またか……」

静寂を乱すサイレンの音に、溜息を吐く。

パトカーと救急車、二種類の音。

最近騒がれている、連続殺人事件とやらだろう。

被害者は皆、善人とは言えないような人物で、犯人を擁護するよ
うな意見まで

出る始末である。

だが、個人的にはその犯人を許す事は出来ない。

「人の癒しの時間を邪魔するのは大罪だよな」

誰にともなく呟くと、眠りに就くことにした。

やがて夜が明け、差し込む朝日で目が覚めた。

時計を見ると、既に8時を回っていた。

明らかに眠り足りないのだが、睡魔と戦いつつ、身仕度を整える。
食事の用意は面倒なのでしない。そもそも、寝起きで食欲が無い

のだ。

怠そうに準備をし、向かう先は学校。日常の中で、最も退屈で意味の無い時間だと思っている場所。

それでもちゃんと学校に行く理由の一つ。

俺はルールを破る事でしか自己主張出来ない馬鹿共とは違うだけだ。

だからと言って、ルールは守らなければいけないと思っている訳ではないが。

時計を見れば、既に遅刻が確定している時間だ。

「それじゃあ行くか」

慌てる事も無く、のんびりとした足取りで部屋を後にした。

学校に到着した時には、既に授業が始まっていた。

「屋上かな」

教室には向かわず、屋上へと向かう。

授業の邪魔をしたくないので、次の休み時間まで時間を潰してから教室に向かう事にしたのだ。

季節は秋、一眠りするには良い気候だ。

屋上への扉を開くと、爽やかな風が通り抜ける。

空はよく晴れて、澄み切った青空が広がっていた。

気持ち良く眠れると思っていたのだが、そうもいかないらしい。

「あークソッ。今日もまた逃がしたっ」

そこに居たのは明らかに学校関係者ではない女。

ジーンズに黒いジャケットという格好で、機嫌が悪そうにしている。

「そこにあんた。ここで何してる」

そこで初めてこちらの存在に気付いたのか、女は驚いたように振

り返る。

「何で人が来るのよ」

更に不機嫌になる女。

「俺は学生。ここは学校の中。何の不思議も無いじゃないか」

今は授業中の上、屋上は立ち入り禁止になっているのだが、その辺りは無視。

「あんたは何者で、どうしてここにいるんだ」

その問いに、女はゆっくりと近付きながら答える。

「私は悪魔。ここでは休憩してただけよ」

あまりからかわれるのは好きじゃない。

「ちよっと位真面目に答えてくれたって良いと思うんだけど」

女は何も答えずに目の前まで来ると、こちらに向かって手の平をかざした。

「今は獲物に逃げられて機嫌が悪いの。余計な手間を増やさないで」

「何を……」

急に頭に靄がかかったようになり、体の力が抜けてゆく。

そのまま意識が途切れてしまった。

気が付くと、屋上の扉に寄り掛かっていた。

「寝過ごしたか？」

頭がぼんやりとして、屋上に来た時の事が思い出せない。

確かに誰かに会ったはずなのだが……

下の校舎からは賑やかな声がする。既に昼休みになっているらしい。

何かを忘れているような苛立ち。

午後の授業に出るのも面倒になってきたので、今日はこのまま帰る事にした。

今日もいつもみたいに町を眺める。

部屋はマンションの8階にある。周囲には他に高い建物も無いので、ベランダ

からは町全体を見下ろす事が出来るのだ。

夜明け前のこの時間。時が止まっているかの様にも感じられる景色に、冷たい

空気と静寂。それらが心を穏やかにし、思考をクリアにしてくれる。

だが、今日はいつもと少し違う。

誰かに屋上で会ったはずなのだが、それを思い出そうとしても、何故か上手く

思い出せない。思考が止められているような、気持ち悪い感覚がしている。

「寝るか」

これ以上考えていても無駄だろう。

諦めて部屋の中に入ろうとした時、視界の端に何かを捉えた気がした。

何かが空を飛んでいる。

暗闇の為、はっきりとは見えなかったが、鳥などの大きさでは無いと思う。

「近いな……」

その影が降り立ったのは川の辺り。ここからなら歩いてすぐの距離だ。

勘違いだったとしても、散歩だと思えばいい。川原なら気分転換にもなる。

そう結論付けると、早速出掛ける事にした。

「確かこの辺りだったと思うんだが」

川原までやって来ると、辺りを見回すが、特に変わった様子もない。

ただの勘違いだったのだろーと思い、戻ろーとした時だった。

「あそこか」

少し先にある橋の下、影になっている場所で、何かが動いた気がした。

そこには、背中に大きな翼を生やした何かがいた。

「誰っ!」

その何かが振り返り、赤く輝く瞳がこちらの事を捉える。

見覚えのある女だった。

しかし、思考が止められたようになり、思い出す事が出来ない。

「学校の屋上で会わなかったか?」

その言葉を聞いて、女は驚いたように目を見開く。

「あの時の子供?」

どうやら当たりだったらしい。

思考が止められたようになったのは、こいつが原因という事か。

とりあえず原因が分かってすっきりしたので、次の疑問を解決する事にする。

「怪我をしているのか?」

女の右腕からは血が流れていた。

「これくらいの怪我なら平気よ。そんな事より、何で私の事を覚えていたのかを

教えなさい」

だが、女の言葉は無視する事にする。

「おい。手当てをしてやるから家まで来い。話は後でいくらでも出来るだろ」

「ちよつと。何を……」

女にとっては完全に予想外だろう。だが、いちいち反論を聞く気は無い。

「本当はあんまり関わりたくないんだ。見るからに普通じゃないし」
翼がある時点で、普通の人間ではないだろう。

「それならどうして手当てをしてやる、なんて言い出したのよ」

別に深い理由がある訳ではない。

「怪我人を放って帰って、気持ち良く眠れる程、俺は冷たい人間ではないんだ」

偽善者ぶっているつもりも無い。本気で自分の安眠の為なのだ。

「分かった。もういいわ」

呆れているみたいだが、ちゃんと手当ては受けてくれるらしい。

「それじゃあ行こうか」

家に向かって歩きだす。

どうやら、今日も事件が起きたみたいだ。

静かな町に、サイレンの音が響いていた。

第1話：出会い（後書き）

1話終わって、まだ人の名前が一度も出てきてないというふざけた状態。2話目からはなんとか……なるのかなあ。

第2話：悪魔

「おとなしく座っていてくれよ」

部屋に戻ると、どこかにしまっておりあはずの薬箱を探す。

ふと、重要な事を聞き忘れていた事に気付いた。

「おい。あんたに普通の薬が効くのか？」

女の背中には巨大な翼が生えているのだ。明らかに普通の人間ではない。

「意味はあるわよ。ほんの少しだけど。でも、放っておいたってこれくらいすぐ

に完治すると思うわ」

女の腕にある傷は、結構大きいように見える。

「本当に平気なのか？」

見つけた薬箱から、包帯と消毒液を取り出しながら話し掛ける。

「あら。私の事を心配してくれるのかしら」

どうやら、まともに相手をするだけ無駄らしい。

「とりあえず上着を脱げ。治療の邪魔だ」

「もっと他に言い方は無いのかしら。女の子に嫌われるわよ」

そう言いながらも、上着はちゃんと脱いでくれる。

部屋にも黙って一緒に来たし、以外に素直なのかもしれない。

傷口の方を見ると、血が固まり、砂などで結構汚れていた。

「とりあえず傷口を洗った方が良さそうだな」

バスルームへと連れていき、傷口をシャワーで洗い流してやる。

出血はほとんど止まっている様だった。

簡単に治療をしてやり、包帯を巻き終わるころ、何か違和感に気付く。

「翼はどうしたんだ」

女の背中から生えていたはずの翼が無くなっているのだ。

「邪魔になると思ったからしまっちゃったわよ」

どうやら自由にしまう事が出来るらしい。なかなか便利そうだ。

「あんたは何者なんだ」

ずっと気になっていた事を聞いてみた。

こちらからすれば、至極当然な疑問なのだが、女にとっては違っていたらしい。

「ちょっと。思い出したんじゃないの」

何の事か分からずにいると、女は呆れた様に言う。

「あなた、屋上で会った事を覚えていたじゃない。その時に言っただけよ。私は

悪魔だ、ってね」

悪魔……

普通なら信じられない話なのだが、残念ながら否定出来る要素が無い。

「悪いがまったく覚えていないんだ。正確に言えば、覚えているはずなのに思い出せない」

思い出そうとすると、思考が出来なくなるんだ」

思い出そうとしても、頭がぼんやりとして、何も考えられなくなるのだ。これは俺にとって非常に不愉快な事だ。

「記憶の封印は生きているのね。それじゃあどうして私と会った事を覚えていたのかしら。思い出せないのでしょうか？」

「ああ。それは思い出せない事を不自然に感じたからだな。それと同じ感覚を、

あんたに会った時にも感じたんで、もしかしたらと思ったんだ」

確証なんか無かったのだが、女の方は、俺が覚えていたと勘違いしたらしい。

部屋まで一緒に来た理由も、何故屋上の事を覚えていたのか、ちゃんと確かめる為だったそうだ。

「とりあえず記憶の封印とやらを解いてくれ。すごい不快なんだ」
「分かったわ。まったく、こんな人間は初めてよ」

女がこちらに向かって手をかざすと、一瞬光に包まれる。

屋上の事を思い出そうとしても、頭がぼんやりとする不快な感覚は無い。

「さあ、これで問題無いでしょう。今更どうでもいいような記憶だろうけど」

実際、思い出したのは女が悪魔だと名乗った事だけだった。

しかし、重要なのは内容よりも、思考を邪魔されずにちゃんと思
い出せるとい

う事なので、別に問題は無かった。

「これですっきりしたよ。もう記憶の封印っていうのを俺にやらな
いでくれよ。物凄く気分が悪いから」

誰かに悪魔の事を話すつもりも無い。

「でも普通なら思い出せなくても、すぐに気にしなくなるはずなん
だけど」

「俺は気になるんだ。別にいいだろ。寝るから後は好きにしてくれ」
それだけ言うと、自分の寝室へと戻る。

簡単に言えば、これ以上関わるのも面倒なだけだ。

「あらそう。それなら私も適当に休ませてもらうわ。おやすみなさ
い」

目覚めた時にはどこかへ行っていてほしいものだ。

俺は静かに生活していたいんだから。

目が覚めると、もう昼に近い時間だった。

「眠い……」

今日も学校は普通にあるのだが、行く気にはならなかった。

「とりあえずは飯だな」

まだ起きたばかりだが、腹は減っている。

食事の準備をしているうちに眠気も覚めるだろう。
そんなことを考えながら扉を開ける。

「あら、ずいぶんゆっくりなお目覚めね」

目の前には自称悪魔の女がいた。

「なんだ。あんたまだここにいたのか」

寝ている間に、どこかへ行ってくれているのが理想だったんだが。
「あなたにお願いしたい事があってね。起きてくるのを待っていた
のよ」

「断る」

悪魔の頼みなど、まともなものであるはずがない。

「話くらい聞いてくれないかしら」

「嫌だ」

当然のように即答した。

お互いに、笑顔のまま動こうとしない。

「はぁ。仕方ないか」

こちらの意志が伝わったのか、女は諦めたように呟いた。

「悪いな。だが、俺はこれ以上あんたと関わるつもりは……」

「無理矢理にでも従ってもらおうかしら」

関わるつもりは無い。

そう言おうとしたのだが、物騒な言葉に遮られてしまう。

女は相変わらず笑顔を浮かべていたが目が笑っていない。

「俺は何をすればいい」

あっさりと降伏した。

逆らうだけ損だと悟ったのだ。

「とりあえず学校に行ってきなさい」

「別に休んでも問題無いと思うが」

どうせもう午前の授業には間に合わない。

「あの学校はこの辺りだと一番大きいでしょ。私の探している奴が
いるかもしれ

ないのよ。だから、普段と違う感じの人がいないか、探してほしい

の」

思ったより普通の頼みで良かった。

人探しの目的は気になるが、それは帰ったら聞けばいいだろう。

「分かった。あんたの言う通りにするよ。準備を済ませたらすぐに行く」

午後の授業に間に合う為には、食事の用意をしている暇はない。内心溜息を吐きながら、制服に着替えようと寝室へもどろうとする。

「ちょっと待って」

呼び止められたので振り返る。まだ何かあるのだろうか。

「私の事をあんた、って呼ぶのやめてくれるかしら。私にはカーラっていう名前があるんだから」

悪魔がそんなことを気にするとは以外だった。

「分かったよ。カーラって呼べば良いんだな」

そう言うのと、カーラは満足そうに頷く。

「俺の名前は真。川島真。短い付き合いだろうが、よろしくな」
相手が名乗ったので、こちらも名乗った。

「そう。それは分かったから早く出掛けたら」
自分が先に呼び止めたのに、ずいぶん言い方だと思っただが。
「分かっているよ」

まともに相手をして、疲れるだけだろう。

俺はさっさと着替えて出掛ける事にした。

「それじゃあ行ってくる」

準備が整うと、カーラに声をかける。

「そう」

カーラはテレビに夢中らしく、適当な返事が返ってくる。

俺は放っておいて出掛ける事にした。

ドアを閉める瞬間、中から声がした。

「いってらっしゃい。早く帰ってきなさいよ。シン」

第3話：学校

学校という場所は、あまり好きじゃない。

授業中の、静かで、緊張感のある雰囲気も、休み時間の喧騒もだ。自分の居場所ではないような感覚。

周りの人間がひどく遠くに感じるのだ。

「やっぱサボるか。普段と違う奴なんて、どうせ分からないしな」
他人に対する興味が薄いのだ。普段の様子がどんなものか分からなければ、違いを比べる事も出来ない。

「川島。今頃登校か」

突然声をかけられる。

「大神……」

いきなり嫌な奴に会ってしまった。

「たまには朝から来たらどうだい。中途半端だと周りも迷惑だ」
大神隼人。

俺と同じクラスの奴なのだが、いちいち口煩くて嫌いだ。

高三の秋という時期を考えれば、多少神経質になるのも分かるのだが。

「善処するよ。でも睡魔には勝てなくてね。朝は辛いんだ」

夜明け前の時間に、いつも起きているのが原因なのだが、やめる気はない。

こちらの態度が気に入らないのか、大神は不機嫌そうな顔をする。
「まあいい。午後の授業に出るのなら、寝ないでくれよ。真面目に授業を受けて

いる奴の邪魔になる」

言いたい事だけ言って、大神は行ってしまおう。

「俺も教室に行くか」

やっぱり学校は嫌いだと思いながら、校舎の中へと入った。

昼休みの教室はやはり騒がしい。

「川島君。今日はちゃんと来たのね。と言っても、もうお昼だけどさりげなく教室に入ったつもりだったのだが、一瞬で気付かれてしまった。」

「おはよう。山野」

爽やかに挨拶をするが、あまりお気に召さなかったらしい。

「いや、もうお昼だし」

そう言う山野は、若干苦笑いだ。

「実はさっき起きたばかりなんだ。だからおはようで合ってる」
起きてから、まだ一時間くらいしか経っていない。

「そんなこと偉そうに言わないでよ」

呆れられてしまった。

山野美琴。

こいつも同じクラスで、結構ストレートに物を言うタイプの人間だ。

男女問わず人気があるのだが、あまり騒がれるのは好きじゃないらしい。

「また避難か？」

小声でそう聞くと、山野は小さく頷いた。

「昼休みは川島君が居てくれると助かるね。全然人が集まらないしさりげなく貶されている気がするが、気にしない事にした。」

山野の席は俺の席のすぐ前で、机の向きを変えると弁当を広げる。

「落ち着いてお昼が食べられるのは良い事だよね」

「どうやら昨日は落ち着いて食べる事が出来なかったらしい。」

「集まられるのが嫌なら、直接みんなに言ったらどうだ」

「いや。言いにくいじゃない。それにそんなこと言わなくても、川島君の近くな

ら静かだしね」

そう言つて弁当を食べはじめる山野。

「あれ。川島君は食べてきたの？」

こちらが何も食べていないのに気付いたらしい。

「食べてないよ。ちよつと時間がなかったから」

今日はカーラに追い出されたから食べ損ねた。

「購買で何か買ったら？」

俺もそうしたいのだが、それが出来ない理由があるのだ。

「財布を忘れた」

あまりにも情けない理由だった。

山野は苦笑いを浮かべると、自分の弁当を食べる事に集中しはじめる。

どうやら分けてくれる気はないらしい。

「よう、川島」

うるさいのが現れた。

「何か用か？」

「別に。俺はミコちゃんに会いにきただけだし」

斎藤桂吾。

相変わらず軽い奴だ。

「ミコちゃん。今日も可愛いね」

山野に声をかけるが、完全に無視されている。

「桂吾。少しは静かにしていたらどうだ」

そう言つと桂吾が、勢い良くこちらを振り返る。

「お前は良いよな。最近はいつもミコちゃんと一緒にお昼じゃないか。何故だ。」

お前らまさか付き合つてるとか言わないだろうな」

意味の分からないキレ方をされた。と言うか、教室全体がざわついている。

「何を馬鹿な事を言つてゐるんだ」

はつきりと否定するが、信じる気はないらしい。

「だったら、お前だけ一緒にお昼なのはどうしてだ」

口には出していないが、クラスの中には頷いている奴も多い。

「お前みたいに騒ぐ奴らがいるからだろうが」

そう言うと、教室が少し静かになる。みんな自覚はあったらしい。

「いや、全く意味が分かんない。それと、お前がミコちゃんと一緒にお昼を食べ

る事とは、関係ないだろ」

一人だけ分かっていない奴がいた。

「お前は分からなくてもいいから」

簡単に言えば、変わり者には、だれも関わりたくないという事だ。自分の事を

変わり者だと言うのもアレなので説明はしないが。

「ごちそうさま」

今まで平然と弁当を食べていた山野。こういう姿を見ると、避難の必要なんて

ないんじゃないかと思う。

「斎藤君」

「ミコちゃん。なーに？」

物凄く嬉しそうに返事をする桂吾。

「ちよっと静かにしてて」

言われた通り黙る桂吾。

山野は机の向きを元に戻すと、午後の授業の準備をしはじめる。しばらく経っても、こちらを振り返る様子はない。

「川島。俺はいつまで静かにしていればいいんだ？」

桂吾が小声でそう聞いてくる。

「隣のクラスに帰れよ」

もうすぐ昼休みが終わる時間だ。

「冷たいこと言うなよー」

騒ぎだす桂吾。

静かにしているんじゃないかったのだろうか。

一方の山野は、我関せずといった感じだった。

桂吾を黙らせるのも面倒だとか考えていると、大神が教室に戻ってきた。

「斎藤。お前の教室は隣だろう。さっさと帰れ」
いきなり現れて偉そうに言う大神。間違ったことは言っていないが。

「分かりましたよ」
簡単に静かになる桂吾。

「放課後にまた来る」

それだけ言うと、行ってしまう。大神は桂吾が教室を出ていくまで、その背中を睨み付けていた。

規律に厳しいのは構わないのだが、いき過ぎは迷惑なだけだ。余計な事を言われないように気を付けるとしよう。

放課後。

ようやく睡魔との戦いが終わった。

普段なら無条件降伏なのだが、今日は大神に注意されたばかりなので、眠らずに耐え切ったのだ。

「お待たせ」

また桂吾がやってきた。

「ミコちゃん。一緒に帰らない？」

こいつ……

俺に放課後また来るとか言っていたのに、無視して山野の方に行きやがった。

「ごめんね。私は部活があるから無理かな」

山野は申し訳なさそうに謝る。

「それなら仕方ないよ。気にしないで」

桂吾は少しがっかりとしているみたいだ。

一方の山野は、さっさと帰る準備をし、教室を出ていく。

「さて。それじゃあ俺たちはゲーセンでも行くか」

遊んで帰るのも良いが、カーラに早く帰れと言われているのだ。

「悪いな。用事があるから早く帰る」

桂吾はかなりショックを受けたらしい。

「何でお前までそんな嘘を言うんだ。そんなに俺が嫌いなのか」

お前まで、という事は、山野も嘘を言っていた事に気付いたらしい。

三年の秋になっても部活をやっている奴なんて、殆どいないだろう。

「安心しろ。俺の方は本当に用事だ」

「俺の方は、とか言わないでくれ。ショックだから」

今ので余計落ち込ませてしまったらしい。

「あー。じゃあ俺は帰るから。またな」

放っておいても、明日には復活しているだろう。

桂吾を無視して帰ろうとした時、カーラに言われていた事を思いだした。

「いつもと様子が違う奴なんて分かんないな」

第3話：学校（後書き）

第3話終了です。 全くストーリーが進まないのは気のせい、のはず。 とりあえず人が何人か出ましたが、誰がどれだけ話に関わるかは微妙。 もう出番が無い。なんて事はないと思います。

第4話：講義

学校から戻り、扉に手を掛けた瞬間、重要な事に気付いた。

「忘れてた」

昼に家に出た時に、鍵を閉めていなかったのだ。

なんとなく嫌な考えが頭に浮かび、手にじっとりと汗をかく。

「……」

留守の間にカーラが何かするとは思っていなかった。なにかする
なら堂々と、

そのあと記憶の封印とやらをすればいいのだ。

しかし、カーラがどこかへ行ってしまったらどうだろう。

目が覚めた時には居なくなっていて欲しいと願っていたが、留守
の間、玄関を

開けたままどこかへ行かれるのは困る。

一人暮らし学生としては、生活費が無くなったらどうにも出来な
い。

このマンションはセキュリティもしっかりしている為、大丈夫
だとは思うの

だが、不安は拭いきれない。

ゆっくりと扉を開く。

テレビの音が聞こえる。

中に入ると、そこには出かける前と変わらず、ソファでくつろ
いでテレビを

見ているカーラが居た。

「あら、お帰りなさい」

「ただいま……」

心配して損をした。

まあ、何事も無かったのだから良い事だろう。

「それで、怪しい人物は見つかったのかしら」

出かける前に言われた、いつもと様子の違う人物の事だろう。

「知らん」

「ちょっと。もう少し真面目に答えてくれても良いんじゃないの。別にすぐ見つ

かるとは思っていないけどさ」

自分で頼んでおいて失礼な事を言う奴だ。そもそも、情報が少なすぎるのだ。

「一体何を探しているんだ？」

「知りたいの？」

聞かない方が良いような気がしなくもないのだが、とりあえず頷いた。

少し迷ったようにした後、カーラは口を開いた。

「天使」

今、おかしい単語が聞こえた気がする。

「悪い。もう一度言ってくれ」

何かの聞き間違いだと嬉しいかもしれない。

「だから天使よ。天使。聞いたことくらいあるでしょ」

自称ではあるが、目の前には悪魔だっている。事実、こいつが普通の人間では

ないのは確かだし、天使がいても不思議ではない。

「分かった。とりあえずやる事は一つだな」

あまり理解はしたくないが仕方ないだろう。

物凄く面倒な事に関わってしまったているらしいが仕方が無い。とにかく可能な

限りの情報を集めなければ。

「やる気になってくれたのかしら。でも足で探すとかは嫌よ。面倒だし、疲れる

だけだもの」

あまりにも自分勝手な事を言うカーラ。どうやら、やらなければいけない事が

増えてしまったらしい。

カーラに近づき、目の前に立つ。

「それで、どうするの？」

拳をゆっくりと上に。

「殴る」

それをそのまま垂直に、カーラの脳天めがけて落としてやった。

「痛っ。ちよっと、何するのよ！」

「うるさいっ。少しは自分で働け。と言うか、そういう情報は最初
に言えよ」

まずはカーラの知っている事を話してもらわないと駄目だろう。

闇雲に探した

ところで、見つかるわけがない。

「とにかく知っている事は全部話せ。それが嫌なら自分一人で探す
んだ」

強く言うのと、カーラは困ったような顔をする。

「別に良いけど。全部話したら、ちゃんと最後まで協力してくれる
のかしら」

追い出すなら今しかないという感じだ。

面倒な事は嫌いだが、天使とやらには興味がある。

「手伝うよ。俺にできる事ならな」

悪魔と天使という非現実的な存在と関わる機会は、もう二度と無
いだろう。

「それなら話をするけど……」

何か言い辛そうに言葉を濁すカーラ。

「どうかしたのか」

「お腹空かない？」

確かに空腹には違いない。が、だからなんだというのだろうか。

「食べてからゆっくり話をしましょう」

夕食にするには早い時間だが、別に構わないだろう。

「分かった」

頷くと、カーラは笑みを浮かべる。

「じゃあ早く用意して」

その言い方に腹が立った。

そもそも、昼に食べる事が出来なかったのもカーラが原因だったのだ。

「……」

軽く睨んでやるが、全く気にしていないみたいだった。

「すぐ用意する。メニューに文句は言うなよ」

「はい。ありがと」

俺は文句を言うのも無駄だと思い、夕食の準備を始める事にした。

テーブルに並んだ料理。簡単なものではあるが、見た目は悪くない。

「意外と美味しいわね」

カーラは料理が気に入ったのか、それともただ空腹だっただけなのか、物凄い

勢いで食べていく。

「もう少し味わって食べようとか思わないか」

別にゆっくり夕食を楽しもうという気は全然ないのだが、あまりにも食べ方が

汚いのだ。まさに飢えた獣状態。まともなのは最初の一口だけだった。

こちらの言う事も完全に無視だ。ひたすらに食べ続けている。

「ふう。ごちそうさま。思ったよりは美味しかったわよ」

あつという間に用意した分を完食したカーラ。用意した中には、こちらの分も

含まれていたのだが。

全く悪びれた様子はない。こっちは明らかに食い足りていないのだが、文句を

言ったところで意味は無さそうだ。諦めて後で何か食べよう。食パンぐらいなら

残っていたはずだ。

「それじゃ早速話の続きをしようじゃないか」

片付けは後でもいいだろう。好奇心は我慢出来ないのだ。

「そうだったわね。じゃあまずは何を聞きたいのかしら」

今わかってるのは探しているのが天使だという事だけだ。

「まずは天使や悪魔がどんな存在なのか聞かせてくれ」

この辺は完全に興味からくる質問。

「どんな存在かって聞かれてもね。口で説明するのは難しいんだけど……」

カーラは少しの間考える。

「分かりやすく言うなら、こことは違う世界の住人。あなた達とは違って、直接

神の手で創りだされた存在たち」

「神の手で……」

「そう。悪魔は感情のままに生き、天使は理性に縛られて生きる。

神は、二つの

種族をそれぞれの世界に住ませ、どのような未来を紡ぐのかを見た。神による

実験よ」

実験。全知全能というイメージの神には、似つかわしくない言葉だろう。

「一体何の実験なんだ」

どんな未来を紡ぐのかを見た、と言われてもいまひとつピンと来なかった。

「それは教えるわけにはいかないわよ。この世界もまた、神の実験の為に創られた世界。だからこの世界に対して必要以上に関わる事は禁じられているの。ここ

まで説明をただけでも大サービスよ。それに私達の歴史なんて聞いても仕方がないでしょう」

言っている事は分かる。確かに興味はあっても、今必要な事ではない。

「私達には創造する力と、世界の理に干渉する力があるわ。この世界では、力が

かなり押さえ込まれてしまっていて、自分の周りの、ごく狭い範囲にしか効果は

及ばないけど。その上、今の私みたいに自分の体を創っていると、それだけで

結構な力を消耗しているの。これは天使も同じね」

「なあ。ちょっといいか？」

話を聞いていて、気になる事ができた。

「自分の姿って自由に変えられるのか？」

カーラはさっき、自分の体を創っていると聞いたのだ。

「それは出来るけど。何度も変えたりはしないわよ。体を創る度に力は消耗して

いくの。でも、創った体を維持するだけなら、普通に食事をするだけでも何とか

なるわ。体の構造は本物にかなり近いから」

あまり変えることはないが、姿を自由に変える事も可能という事だ。

「じゃあさ、カーラの探してる天使が今どんな姿なのか分かるのか？」

相手の姿が分からないんじゃないかなと探しようが無い。

「知らないわよ。昨日ようやく見つけたと思ったら、さっさと逃げちゃったし」

軽い感じで言っているが、そんな相手を探す身にもなってほしい。「で、そんな奴をどうやって探すんだ。例えその天使とすれ違って

も、俺は気が

付かないと思うんだが」

別に協力するのが嫌で言っている訳ではない。無理なものは無理なのだ。

「探して欲しいのは、いつもと様子の違う人間。そう言わなかったかしら」

「確かに言われたけど……」

だが、それがどうして天使を探す事になるのか、普通は分からないだろう。

「私達がこの世界に留まっているには体が必要な。それが無ければ、不安定な

状態の存在になり、最悪の場合はそのまま消滅してしまうかもしれない。けれど

自分で体を創るには、かなりの力を消耗する。だったら他人の体を借りてしまえ

ば良いということよ」

「そんな事が出来るのか？」

「相手が拒絶しなければね。人の精神に対して出来るのは、強力な暗示って程度

の事だから。それに、体の持ち主の方が優位で、思い通りに体を支配するなんて

出来ないわよ。それでも不安定な状態にもならず、余計な消耗もしなくて済む。

それで体の持ち主が協力的なら文句無しね」

つまり、天使は誰かの中に潜んでいて事なんだろう。

「それでウチの学生を疑う根拠はなんだ」

「まずは年齢。まだ未熟で不安定な精神を、暗示を繰り返す事によって、自分の

扱いやすいように変えていく。でも時間が掛かるから、使い捨てには出来ない。

だから、丈夫で長持ちする体が望ましいわね。これが一番の理由だけど、他にも学生って身分と、比較的自由に時間が取れる事かしら。なるべく目立たずに事を起こすにはちょうどいいのよ。そして、この町で条件を満たす人間が最も見つかりそうな場所と言えば一箇所」

「学校か……」

いま通っている学校は、この近辺で一番大きい学校だ。都合のいい人間を探すには、確かにぴったりだろう。

だが気になる事もある。

まず最初に、この町で、と限定した根拠は何なのか。仮に、天使の存在が感じられる、とか言うのであれば、すでに居場所が分かっているもおかしいし、カーラが自分で探した方が早いだろう。

そしてもう一つ。その天使の目的について。この町で何をするつもりなのか。

「何で天使がこの町にいるって判ったんだ？」

まずは一つ目の疑問から。

「簡単な事よ。奴はもう行動を起こしているから。」

「行動？」

それは、抱いていたもう一つの疑問。

天使のイメージとして、普通なら繋がらないような答えが待っていた。

「連続殺人事件って奴よ」

第4話：講義（後書き）

話の大部分は会話でした。カーラによる悪魔と天使についての講義です。これを読む限り、強いんだか弱いんだか良く分からないかんじですね。

第5話…決意

朝の学校。まだクラスの半分程の人数しか登校していないようで、教室の中は

それほど騒がしくも無く、のんびりとした空気が流れている。

「あら。珍しい。川島君がこんな早くに来てるなんて。と言うか初めて?」

声を掛けてきたのは山野だ。

「おはよう。いきなり失礼な事を言うんだな」

「あー。ごめんね。それとおはよう」

あまり素直に謝られてもちょっと困る。ここ一年以上、朝のHRに間にあった

記憶は無い。

「別に気にしないでくれ。こんなに早いのは本当に久しぶりだから」
そう言うと、山野は苦笑する。

「今日はどうして早いのか。何かあった?」

「いや、別に。ただ今日は寝過ぎしただけ」

「寝過ぎした?」

不思議そうに聞き返してくる山野。まあ当然の疑問だろうが。

「もう席に戻った方がいい時間じゃないのか」

担任が教室に来る時間なんて知らないが、そろそろHRの時間のはずだ。

「んー。そうね。じゃあ席に戻るわ」

軽く手を振って、自分の席に戻る山野。

ようやく一人になった。別に山野が苦手、とかでは無いのだが今日は考えたい

事があったのだ。

朝早くから学校に来ているのもそのせいだ。考え事のせいでなかなか眠れず、

いつものように、夜明け前に起きる事が出来なかったのだ。結果、目が覚めたの

は学校に来るのにちょうどいい時間だったのだ。

「出席を取るぞ」

少しして、担任が教室に入ってくる。

「珍しいな川島。今日は朝から来ているのか」

担任も山野と同じような反応だった。それを適当に聞き流しつつ、自分の考え

事に集中する。

考え事とは、カーラから聞いた話についてだ。殺人犯と関わりた
いとは思わな

い。だが、事件は解決してほしい。

犯人は気に入らないし、自分に捕まえる力があるならそうしたい
気持ちもある

のだが、そのために危険な目に遭うのもごめんだ。

これからどうするべきか考えながら、あっという間に時間が過ぎ
ていった。

眠い。腹が減った。

退屈な授業を乗り越え、ようやく解放された。

「帰るか」

そう呟き、立ち上がった瞬間、肩を誰かに掴まれ、そのまま座ら
された。

「川島。鞆なんか持ってどこへ行くんだ」

振り返ると、そこには大神が立っていた。

肩を押さえる力は、意外と強い。と言うか痛い。

「お前から話し掛けてくるなんて珍しいな」

鞆を机に掛け直すと、肩を掴んでいた手の力が弛んだ。

「少し話したい事がある」

「分かった。でもその前に昼飯くらいは買ってきてもいいだろう」
今度は鞆から財布だけを取り出してみせる。

「大丈夫だ。話はすぐに終わる」

どうやら逃がしてはくれないらしい。諦めて話を聞くしか無いようだ。

「それで、話って何だ」

「夜明け前。まだ薄暗い時間によく出歩いているらしいな。何をしているんだ」

「ただの散歩だけだ」

簡潔に事実のみを正直に答える。信憑性は全く無いだろうが、本当の事だから仕方がない。

「そんな時間にどうして。いつも昼近くに学校に来るような奴が」
夜明け前に起きるせいで学校に来れないのだが、それを正直に言っても、大神の怒りを買うだけだろう。

「別にいいじゃないか。特に問題を起こした訳じゃないだろう」
「確かにそうだな。だが、これからそうとは限らないだろう」

しつこい。早く昼飯を買いに行かないとまともな物が買えなくなってしまう。

もう手遅れな気もするが。

「二人で何を話してるの」

山野だ。このタイミングで来られると、余計に逃げづらい。

「山野か。ちょっと川島に注意をな」

「注意って。川島君、何かしたの」

「別に。大神が人の趣味に文句を言っているだけだ」

空腹のせいかな、少しイラっている。早く話を終わりにしたい。

「何が趣味だ。散歩なら夜が明けてからすればいいだろう。なんにも暗いうちから」

出歩く必要は無いだろう」

「それは俺の自由だろう。誰かに迷惑を掛けている訳じゃないんだから」

とりあえず口でだけ謝る事も出来るが、今のところ夜明け前に出歩くのをやめる気はない。

そうすると、後で大神がうるさいだろうから、ここで諦めてくれると助かる。

「諦めて大神君の言うことを聞いたらどうなの」
意外にも、山野は大神に賛成らしい。

「俺は別に悪い事をしてる訳じゃないんだが」

「そうじゃなくて。最近は何事もない。だから変な事件に巻き込まれないよう」

に気を付けた方が良くって事。ね、大神君もそう思うでしょ」

例の連続殺人事件の事を言っているのだろう。狙われるのは、人から恨まれる

ような事をしている奴ばかりだと言うが、相手は犯罪者。危険な事には変わり無いだろう。

「俺は余計な問題を起こして欲しくないだけだ」

冷たく言い放つ大神。

「素直じゃないのね。別に照れる事無いのに」

山野は笑みを浮かべながらそう言う。俺としては、大神が他人の心配をする、

と言うのが信じられないのだが。

「なんか珍しい組み合わせで集まってるね。何の話をしてんの」
また隣からうるさいのがやってきた。

「桂吾。暑苦しいから離れてくれないか。と言うか、自分のクラスに帰れ」

「何それ。それが親友に対して言うことかよ。冷たいよなー。ミコちゃんもそう」

思うでしょ」

「親友に対しての態度じゃないのは確かね」

山野も桂吾に同意してはいるが。どこか苦笑いだ。

「だよなー。やっぱり真は冷たい奴だって事だ」

桂吾は嬉しそうに言っているが、山野が言いたいのは、俺が桂吾の事を親友だ

とは思っていないんじゃないか、という事だと思う。

まあ桂吾が満足なら何も言うまい。

「ところで桂吾。一体何の用なんだ」

「ん。ミコちゃんに会いに来たんだけどね、今日は真だけじゃなく大神までいる

じゃないか。だから何の話をしてるのか気になって」

大神には誰かと雑談しているようなイメージは無いのは確かだ。

「俺はもう行く。これ以上話をしてても無駄そうだ」

それだけ言って、大神は自分の席に戻ってしまう。

「あら。行っちゃった」

桂吾を完全に無視してたな。空気を読めない、と言うか読まない奴だ。まあ、

ある意味では空気が読めてたと言えなくもないが。

「んで。結局何の話をしてたんだ？」

「最近物騒だから気を付けましょう、って話」

かなり雑な説明だ。一応間違っていないが、大神がそう言いたかったのかは

甚だ疑問だ。

「物騒って？」

素で聞き返す桂吾。

「連続殺人事件ってやつだろ。ニュースくらい見たらどうだ」

この辺りに住んでいて、事件を知らない奴がいるとは思わなかった。

「事件なら俺だって知ってるよ。でも俺らには関係が無いだろうし」

「意外。斎藤君なら絶対に首を突っ込みたがったのに」

「冗談。いくら俺でも相手くらい選ぶよ」

「そうなのか？」

桂吾なら何をしてもおかしく無いと思っていたんだが。

「二人ともひどいな。一体俺をなんだと思っているんだか」

「何って。ねえ」

言葉を濁す山野。桂吾のイメージはどれだけ悪いのだろうか。

「うう。傷付くなあ。別に良いけど。とにかく、夜中に散歩したりしたら駄目だ

からね、ミコちゃん」

「普通は夜中に散歩く用事なんて無いけどね」

微妙にこちらを見ながら言う山野。俺がおかしいとでも言うのだろうか。

「俺はそろそろ戻るから。じゃあな」

いつのまにか、結構な時間が経っていたらしい。

桂吾が自分のクラスへと戻った後、山野に質問してみる。

「なあ。今から昼飯を買いに行ったとして、まともな物があると思うか」

「無いでしょ。仮に残っていたとしても、食べる時間が無いと思うけど」

「だよな……」

予想通りではあるが、答えは救いの無いものだ。

「もう寝る。起こさないでくれ」

「分かった。じゃあね」

帰ろうかとも思ったが、考えないといけない事がある。

「はあ……」

空腹と、これからの事を考え、少し憂鬱になった。

「ただいま。カーラ、いないのか」

部屋がやけに静かだ。人の気配がしない。

とりあえず荷物を置こうと、自分の部屋の扉を開ける。

「カーラ。ここで何をしているんだ」

何故か人のベッドで寝ているカーラ。

「んゆ。おはよう。帰ってたのね」

少し寝呆けている感じがする。こんな奴が悪魔だと言われても、誰も信じてない

だろう。

「まあいいや。とにかく聞いてくれ」

「んー。何かしら」

まだ完全には目が覚めていないようだが、気にしない事にする。

「協力。する事に決めた」

そう言った瞬間、カーラの目が鋭いものに変わる。

「本当にいいのね」

その言葉に対して、静かに、はっきりと頷いた。

第5話：決意（後書き）

次からようやく事件へとかかわっていきます。犯人が誰なのかもすぐに分かるでしょう。登場人物少ないですしね。

第6話：搜索

後悔。

俺はどうして殺人犯なんかに関わる道を選択してしまったのだろうか。そして

何故、こんな所にいるのだろうか。

「早く家に帰って寝たい」

ささやかな願い事。それすらも許さぬ悪魔が目の前にいた。

「黙ってて。それと寝るのは勝手だけど、寝たらここに置いてくから」

こんな所に放置は本気で困る。どんな場所にいるのかと言えば、工事中のビルの屋上なのだ。

「なあカーラ。こんな場所じゃないといけない理由があるのか」
工事中と言っても、外観は完成しているみたいで、危険な感じはしないが。

「見つかったら面倒だぞ。それにちょっと寒いし」
季節はまだ秋とは言え、夜中はかなり涼しくなってきた。その上、ここは

結構強い風が吹いている。

「黙ってて、って言ったのが聞こえなかった？」

カーラに睨まれ、諦めて静かにしている事にした。

それにしても暇だ。その上寒いし眠い。事件が起きれば、つまり、犯人が天使

の力を使えば、それを感知して場所が分かるらしいのだが。

それから三十分は経っただろうか。そろそろ我慢も限界だ。

「今日はもう諦めないか」

正直返事は期待していなかったが、早く帰る為にも言うだけ言うてみる。

「今日はお出でこないつもりかしらね」

そう呟き、こちらの方を向いた。

「今日はこれくらいにしましょうか」

ようやく諦めてくれた。ちなみに、この場所に来てから三時間は経っている。

「カーラ。マンションからじゃ駄目なのか。見晴らしならここよりも良いくらい」

だと思うんだが」

毎日こんな場所で何時間も過ごすなんて耐えられない。

「あなたの部屋からだって探すことは出来るけどね。見つけた後、追い掛けない

といけないんだから。マンションからじゃ、捕まえられるわよ」

「カーラは空を飛べるんだし、そんなに気にする程の時間じゃないだろ」

「そんなの駄目に決まってるでしょ。私の力を使えば相手に気付かれるわよ」

カーラの視線は冷たい。そんなのちょっと考えれば分かるだろ、と呆れられて

いるみたいで辛い。

「じゃあどうやって犯人を追うんだ」

自分で聞いておいてなんだが、物凄く嫌な予感。

「走るのよ」

簡潔かつ明解な答えだ。分かりやす過ぎて涙が出てくる。

ああ。己の不運を呪わずにはいられない。思わず空を仰ぐ。

「ちょっと待った」

真剣な表情のカーラ。

「どうした」

「奴が出た。あっちのビルの近く」

そう言っ一つ一つのビルを指差す。

「あそこなら分かる。ここからなら十分もかからない筈だ」

「案内して。最短ルート。ダッシュ！」

これから殺人犯のもとへ行くのだ。恐ろしくない筈が無い。

「分かった」

だが、迷いは一瞬。次の瞬間には走りだしていた。

「こっちだ」

カーラを先導しながら、目的地へと向かっていた。

「後どれくらい」

「2、3分。もう見える」

そう言って次の角を曲がると、先程のビルが見えるようになった。

「詳しい場所は？」

「駄目。少し前から反応が消えた」

カーラは悔しそうに首を横に振った。

「とにかくビルの前まで行こう。何か手掛かりがあるかもしれない」

「そうね」

ビルまでは一直線。急いでいた為か、横道から飛び出してきた影に気が付かなかった。

「シン！」

カーラが叫ぶが間に合わない。

「なっ。うわっ」

「きゃっ」

ぶつかった相手もろとも倒れてしまう。

「大丈夫か。ちょっと急いでいてな。こちらの不注意だ。悪かったよ」

相手の方は、倒れた時に打ったのか、腰の辺りをさすっている。

「大丈夫じゃないけどね。こちらの不注意でもあるから。気にしないで」

気にしないで、と言われても、無視して行くわけにもいかない。

「ほら」

立たせようと、近付き、手を差し出した。

「別に平気よ。一人で立てるわ」

さっきは大丈夫じゃないと言っていたが、一人で立ち上がってみせた。

「まだ少し痛いけど、どこも怪我は無いから」

そう言いながら、服の汚れを払っている。

しかしその間、手を差し出した格好のまま、動けずにいた。

「山野。こんな時間に何をしているんだ」

ぶつかった相手は、山野美琴。正直、こんな場所で会うとは思わなかった。

「え？川島くんじゃない」

山野もこちらに気付いたらしい。

「川島くんこそ何してるのかしら」

殺人犯を追っている。なんて事を正直に言うわけにもいかないの
で、適当にご

まかすしかない。

「眠れなくてな。気分転換に散歩に出てきたんだ」

散歩で全力疾走する人間なんているわけ無いが、どうせ山野を納
得させるのは

無理そうなので、気にしない事にした。

「そう言う山野は……と。とりあえず移動するか。歩きながら良
いか」

まだ遠くだが、パトカーの音が聞こえてきた。以外と対応は早い
らしい。

「別に構わないわ。行きましようか」

山野が飛び出してきた道へと戻っていく。

「なあ。どこへ行くんだ」

「帰るのよ。私の用事はもう済んだから」

明らかに嘘だと思うが、聞いてもまともな答えは帰ってこないだ

ろう。

「よし。じゃあ家まで送ってやろう」

事件の方は、いつのまにか姿を消したカーラが調べておいてくれるだろう。

「必要無いわよ。そんなに遠いってわけじゃないし。それに悪いわ」
本気で悪いと思っているのか。それとも、こちらを警戒しているのか。どちら

にしても、もう少し様子をみたい。山野が現われたのはただの偶然なのか。

「気にするな。散歩のついでだから。一人で歩いてもつまらないからな」

「分かったわ。だったら早く行きましょうか」

山野の先導で、真夜中の町を歩き始めた。

また余計な面倒に巻き込まれてしまった。

山野の家は駅の向こうにあった。だから駅前を通る事にした。ここまででは別に

問題なかったはず。だが、そこから悪かった。最短距離で帰るために、ほんの

少しだけガラの悪い人たちの多い地域に入ってしまったのだ。

「こんなのがまだいたとはね」

目の前には五人の若者。連続殺人事件が話題になりはじめてから、真夜中に遊

びまわるような馬鹿は消えたと思っていたのだが。

「別の町から来たんでしょね。予想外だったわ」

「なあ。聞いてんの。彼女をちよつとの間貸してくれればいいんだけど」

リーダーらしき男が、嫌な笑顔を山野に向ける。

「断るって言ったら」

「男たちは一瞬顔を見合わせると、笑いだした」

「川島くんは先に帰った方がいいわ。今の私ならこれくらい平気だから」

「ほら。彼女も平気だって言ってるんだからさ」

ニヤつく男たち。こういうのを見ると我慢が出来なくなってくる。

「山野。ここで帰ったら何の為に送ってるのか分からないだろ」

一歩前へと進む。

「お。彼氏。やろうってのか。格好付けようとしても後悔するぜ」

リーダーらしき男がいきなり殴ってきて、一発で倒されてしまう。

「あーあ。だから言ったのに」

そう言って笑いあう男たち。

一発殴られたおかげで目が覚めた。余計な理性はもう消えてくれた。

「始めようか」

山野に近付こうとした男の足首を掴み、引き倒す。

「何しやがる」

立ち上がると。睨み合いになる。後ろの奴らは笑っているが、倒

された男はか

なり頭にきているらしい。

「どうやら本気で痛い目をみないと分からないらしいな」

再び殴りかかってくる。

大振り。しかも直線的に突っ込んでくる攻撃。相手の腕の内側から外へと払い

のける。そのまま相手の腹へと拳をたたき込んだ。

「がはっ」

拳の威力に加え、男自身の勢いもあって、一撃で行動不能になっ
てしまう。

「な……」

後ろで笑っていた男たちも、突然の事に困惑していた。

「次はお前たちだ」

後ろの四人のうちの一人の顔面に一撃加える。

その一撃でダウンしてしまう男。これで二人目。あまりにも弱すぎる。

残りは三人。ようやく構えてくれた。

「やりやがったな」

男たちは頭に血が上っているのか、それとも弱いだけなのか、ただ拳を振り回しているだけ。

「ぐわっ」

正面から男の一人に拳をたたき込んでやる。

「この野郎っ」

後ろから飛び掛かってくる男。それを見もせずに、回し蹴りで仕留める。

「なあ。まだやるのか？」

残りは一人。最初の一人以外はまだ動けるので、実質四人だが、力の差は歴然だった。

「分かった。おとなしく帰るよ」

残った一人は聞き分けが良かったらしい。腹を抱えてうずくまる仲間を支え、

他の奴らと一緒に町へと消えていった。

「驚いた。川島くんって強いね。ケンカとかするイメージは無かったけど」

後ろで見ていた山野が話し掛けて来る。

「ああ。まあ少しは。でも今のは、相手も弱かったからな」

実際、あの五人組は弱すぎた。はつきり言ってまだ暴れ足りない。

「山野。悪いけど後は一人で帰れるか」

「それは大丈夫だけど。どうして急に。どこか怪我でもしたの？」

「そうじゃないけどな。少し疲れただけ。ちょっと休んでいきたいけど、山野は」

早く帰った方がいいだろ」

本当は一人になりたかっただけ。今は誰かと一緒にいたくない気分だった。

「なにそれ。私は別に気にしないけどね、普通はありえないわよ」
まあ自分から送ると言い出したんだから、普通は家まで送っていいだろう。

「悪いな。許してくれ」

「私は別に気にしないって言ったでしょ。それじゃ私は帰るから。またね」

「ああ。またな」

それだけ言って帰っていく山野。これで一人になる事が出来た。静かに空を見上げると、頬を冷たい風が通り抜けていく。

「はあ……」

ほんの少しだけ、心を支配する衝動が鎮まってきた気がした。

第7話：衝動

馬鹿な不良共に絡まれた場所から少し離れた所。小さな公園に立っていた。

普段は周囲に対して無関心を装ってきた。誰かを傷付ける事を嫌い、悪意ある存在を憎んだ。今の彼を知る人は、彼は無愛想だが悪い人ではないと評する。

川島真。クラスメイトのほとんどは彼に関わろうとはしない。嫌っているわけではないが、心のどこかで恐れているのだ。

「綺麗な星空だ」

別に星に興味は無いが、心を落ち着けてくれた。全てを壊してしまいたくなるような破壊衝動も、かなり落ち着いてきた。

悪い人ではない。そう分かっている、皆に関わろうとしない理由。それは、

この破壊衝動によって引き起こされた事件が原因だった。

今から二年前、高校一年の時の話だ。

周囲の人間と距離を置くようにしていた。自分の持つ衝動が誰かを傷付けないようにする為だったが、他の人から見れば、クラスに馴染めずに孤立しているのと変わりがなかった。

孤立した人間。タチの悪い奴らが狙うにはちょうどよかった。どこにもある

悪意。一人では何も出来ないくせに、誰かを傷付け、自分が優位に

立たないと満

足出来ない愚か者たち。

「イジメは良くないよな」

哀れな少年を取り囲むのは、ちよつとガラの悪い同級生たち。

「イジメじゃないだろう。俺たちはちよつと頼み事をしただけ。悪いのはいつも

それを見捨てるお前の方だと思ふんだ」

勝手な理屈を展開する不良。面倒だったから無視を続けていたが、いい加減に

我慢も限界だった。

「頼み事を聞く理由なんて無かったからな。今日ここに來たのも、放っておくと

周りにも迷惑になりそう。と言うか、既に迷惑だから仕方なくだ」

「生意氣な奴だ。すぐに俺たちの頼みを聞きたくなるようにしてやるからな」

場所は屋上。自分達に逆らう馬鹿な少年を、痛い目に遭わせるにはちようどい

い場所。彼らはそう考えていた。

「ここなら逃げられない、か……」

「そういう事だ。諦めな」

彼らは大きな勘違いをしていた。どちらが逃げる事の出来ない獲物なのかを。

圧倒的な力の差。決着はすぐに付いた。

「不完全燃焼だな」

普段抑えていた衝動が目覚めますが、肝心の相手はもう戦える状態ではない。

倒れている不良たち。大きな怪我こそ無いが、全員が氣絶していた。

「帰るか」

誰かに会う前にさっさと帰りたいかった。下手をすれば、関係ない人を傷付けてしまいたいからだ。

だが、中途半端に痛み付けたのが失敗だった。無駄にプライドばかりが高い彼らを黙らせるには、もっと徹底的にやらなければいけなかったのだ。何日かして、再び同じような状況に陥る。その理由は至極簡単な事。ボコボコ

にした同級生たちの中に、顔の広い奴がいただけ。

相手は上級生で、数も多い。普通なら恐怖してもおかしくない状況を、楽しく

感じている自分がいる。前に目を覚まし、そのまま抑え続けた破壊衝動。それを

解消するにはちょうどいい機会だからだ。

そして地を這う事になる不良たち。彼らもまた、秒殺だった。溢れる衝動に、

つい全員を病院送りにしてしまっていた。

翌日には噂が広がっていた。恐ろしいものでも見るような目を向ける人も少なくなかった。

人と関わらなければ傷付けずに済む。だからこそ、普段から人と距離を置いて

きたのだ。それでも、周囲からの拒絶には堪えるものがあった。

「随分と暗い顔をしているじゃない」

闇の中から姿を現したのはカーラだった。

「ビルの周りを調べていたんだろ。何か収穫はあったのか」

「収穫ね。無くはないって所かしら」

若干肩を落とし気味に答えるカーラ。あまり芳しくない結果なのか、それとも

質問を無視したのがいけなかったのか。

「相手の天使。思っていたよりも厄介ね。意識の侵食をかなり進めているわ」

「侵食？」

「私たちが体を借りている時に、元の持ち主の方が優位に立っているっていうの

は説明したと思うんだけどね、それは長い時間を掛ければ覆せるの。最終的に、

体の持ち主の自我を消してしまう事も出来る。そうなれば、自分の思う通りに体を動かせるし、力も自由に使えるわ」

思ったより状況は悪いらしい。

「そういえば犯人を見つけたら戦う事になるよな。俺は力の使い方なんか知らないんだが勝てるのか？」

初めはなんとかなると、漠然と思っていた。だが、話を聞いていると、こちらに不利な要素が揃っている気がしてくる。

「元の力は私の方がずっと強いわよ。だから協力してくれる人間さえいれば楽勝の予定だったんだけど」

相手が力を完全に使いこなせるなら、こちらが相当不利だという事か。

「シンには私の力が扱えるように訓練してもらわないとダメね。時間が無いのがちょっと問題だけど」

個人的には犯人を早く見つけたいのだが、カーラが急ぐ理由は何だろうか。

「カーラ。急ぐ理由は何なんだ。早く犯人を捕まえるのは賛成なんだが、急いだ結果が返り討ちっていうのは嫌だぞ」

「犯人である天使がこの町に留まっているのは、体の持ち主がそれを望んでいるから。その持ち主の自我が消えれば、何処へだって自由に行ける。

そんな相手を

捕まえるのは、そう簡単な事では無いもの」

相手は普段気配を消しているのだ。近くに居る事が分かっているのに、捕まえる事が出来ずにいる。これで何処に居るのかの手掛かりが無くなっ

た場合、犯人

の天使を見つけ出すのは、ほぼ不可能となってしまうだろう。

そして何より、体の持ち主の自我が消えるまで、あまり時間が無いというのが問題だった。

「急がないとな……」

出来る限り無駄な時間は省きたい。カーラが言った訓練とやらは昼間にしても

らい、夜は天使の搜索に集中するべきだろう。

「シン。さっきビルの近くでぶつかった子、あなたの知り合い？」

いきなりそんな事を聞いてどうするのかわかと思いつつも、カーラの真剣な様子を

見て、正直に答えることにした。

「同じクラスの奴だよ。名前は山野美琴」

「結構仲は良さそうだったわね」

どこからか見ていたのだろうか。あの時はもっと他にやるべき事があったはずなのだが。

「山野とは少し話をする程度だけど。何でそんな事を聞く必要がある

るんだ」

こちらの質問を無視し、カーラは続ける。

「意外ね。あなたと関わる人間がいるなんて」

一体カーラは何が言いたいのだろうか。

「さっきから何だっというんだ」

いつのまにかカーラの表情から真剣さが消え、笑みを浮かべている。

「全てを壊してしまいたいという衝動と、傷付ける事への恐怖心。

矛盾した二つ

の想い。歪んだ心が誰かと関わる事を拒絶してきたんでしょ」

自分の心が壊れているのは理解している。誰かと一緒に居る事が苦痛で、父の

海外への転勤が決まった時は、日本に残って一人暮らしが出来る事になり、内心

喜んだ記憶もある。

だが、一人になったところで無駄だった。抱える矛盾は壊れた心を更に傷付け

続け、孤独がその傷口を深く大きなものにする。

「結局何が言いたいんだ」

怒気を含んだ声。

まともに会話が出来るのは山野と桂吾くらいだ。他は辛うじて大神だろうか。

友人と呼ぶ程の繋がりでは無いかもしれない。だが、そんな弱くて脆いものでも

必要だった。壊れた心を守る為には。

「あなたはそれを失う覚悟があるかしら」

カーラはあくまで笑顔。だが分かる。からかっている訳ではなく、本気だと。

「それくらいの覚悟はしていたさ」

真剣な目で答える。

そう。覚悟はしていた。それこそカーラへの協力を決めた時から。
「そう」

表情は変わらず笑みを浮かべたまま。だが、その声には悲しみに
似た何かが滲

んでいたような気がした。

「なあ。どうしてそんな事を急に聞く」

一瞬の間。カーラの顔からは、いつのまにか笑みが消えていた。

「さっき言った山野美琴？ だったかしら。あの子から天使の気配を
感じたわ」

告げられた言葉。それは予想をしていなかった訳ではなかったが、
あまり聞き

たくなかった事実だ。

「思ったより冷静ね」

「状況から言えば、疑わしい要素はあった。出来れば勘違いであっ
て欲しかった

んだけどな」

山野は俺を怪しんでいたみたいだった。それにビルの近くで会っ
た事も偶然で

は無いのだろう。全てが悪い状況を示していた。

「傷付ける事になるかもしれない。それに争っても損するだけよ」

「分かってるさ」

そう。分かっていた。

「相手は天使だろう。悪魔の言う事なんかを聞くとと思うのか」

「よく分かっているわね」

それきり黙ってしまう。ただ静かに空を見上げる。 どれくらい
そうしていただろうか。やがてカーラが口を開いた。

「哀しいわね……」

真夜中の公園。カーラの呟きが、やけに大きく感じられた。

第8話：訓練

「訓練するわよ」

カーラによるいきなりの宣言。

「マジかよ……」

思わず溜息が漏れる。

別に訓練するのが嫌な訳ではない。むしろ必要な事だと思っている。

「今からじゃないと駄目なのか」

そう言ってカーラを見上げる。ベッドの中からの、ささやかな抵抗。

「駄目よ。時間が無いの」

繰り返すが、訓練が嫌な訳ではないのだ。ただ今は寝させて欲しいだけ。昨夜

帰ってきてから、二時間弱しか寝ていない。

「せめてあと一時間。三十分でもいいから」

カーラは無言。だが、冷たい視線とプレッシャーに負け、諦めることにした。

「分かった。用意するから睨まないでくれ」

そう言うのと、早くするようにとだけ言って、カーラは部屋を出ていく。

ようやく一人になった部屋で考える。もう一眠りしようかと。

「無理か……」

重い頭でも分かる。これ以上カーラの機嫌を損ねるのは危険だと。訓練がどんなものか不安になりながらも、着替えを済まして部屋を出た。

「カーラ……」

ようやく出した声は震えていた。感じる生命の危機に、恐怖が込み上げる。

（何か用かしら。心配しなくても力はちゃんと使えてるわよ。本当に飲み込みが早くて嬉しい限りね）

直接頭に響く声。カーラの力を使えるようにする為に、俺の体に入っている。

カーラなどの悪魔や天使は、こちらの世界での肉体を持っていない。精神だけの存在だ。今の俺は、一つの体に二つの精神を宿している状態。そのおかげで、

カーラの持つ悪魔の力を使えるのだ。

「俺を殺したいのか」

今いる場所は町の遥か上空。カーラによって連れてこられ、頑張ったの一言と共に空中に放り出された。次の瞬間、カーラの精神が入ってくるのが分かる。

それからは必死だった。力の使い方は聞いていたのだが、実践は初めて。その

上、自分の命が懸かっているのだ。空を飛ぶ。正確には、重力の影響から解放される為に全力を尽くした。

（死なせる訳が無いじゃない。いざとなったら、私が翼を構築して上に運び直してあげたわよ。シンを支える翼を創るだけなら、何度か繰り返す力はあるし）

それを聞いて、安心よりも恐怖した。もし失敗していたら、死ぬような思いをした上に、力が使えるようになるまで、それが繰り返されていたのだ。下手をす

れば、本当に死んでいたかもしれない。

「なあ。ここまで無茶な訓練が必要なのか」

空中でふらふらと揺れる体を制御しつつ、カーラに尋ねてみる。

（時間が無いって言ったでしょ。それより次。ただ浮いてるだけじゃ意味が無い

んだから、自由に動けるようにしないと）

動けるようにと言われても、具体的にどうすれば良いのかよく分からない。

「無理。俺には翼とかも無いし、空を自由に飛ぶなんて不可能だつて」

しばらく沈黙が続く。

（はあ。本気でいってるのかしら。私の力が何なのか忘れたの）

頭の中で響く呆れたような声。カーラの力。それは世界の理に干渉する力。力

によって、重力も関係なく浮いていられる。今の状況を考えれば、常識なんてあるだけ無駄だと分かる。

どうやら、俺は思った以上にパニックに陥っていたらしい。考える事は自分の得意分野だし、常識なんて世界を狭めるだけの退屈なモノでしかない。

「悪かった。冷静になれば簡単な事だったな」

膝を曲げるただそれだけの動作。

「確かに扱い辛いけど、やりようによっては反則的な力だな。まあ世界の理に干渉

するというのは、世界のルールを捻じ曲げるという事なのだから当然か」

足先に意識を集中する。その先にある空気を世界の理から、あるゆる力による

干渉から切り離す。空気は質量を持つ物体としてそこに存在してい

る。そして、

世界から切り離されたそれは、不変のモノになる。例えば、この曲
げている膝を

伸ばした時、この空気の塊は微動だにしない。それなら当然こちら
の体が動くとい

う事だ。

勢い良く飛び出す体。しばらくして減速してくると、再び空気を
蹴る事で加速

する。それを繰り返す事で空を自在に飛び回った。

（なかなかいい感じじゃない。それじゃあ今度は止まってみて）

「分かった」

急に止まる、というのは意外と難しい。実戦を考えた場合、勢い
が無くなるの

を待っている事は出来ないので、手を伸ばして空気の塊を掴む事で
無理矢理動き

を止める。当然無理な動きをすれば体に負荷が掛かる。

（あのね。そんな無理な動きは必要無いの。この世界はしっかりと
ルールに縛ら
れているんだから）

ルール。体を止める方法。要するに、体を進ませている力の影響
を排除すれば
いいのだ。

「そうだな。確かに世界はルールに縛られている」

やり方は分かっている。重力から開放されて空に浮いた時と同じ。
いや、それ

よりも簡単だろう。重力は、引力と遠心力の合力。二つの力の影響
を同時に排除
しなければいけなかったが、今度は単一。慣性のみを排除すればい
い。

実際にやってみると、気持ちの悪い感覚だった。力を使った瞬間、

その場へと

完全に静止した。しかし、体への衝撃などは全く無いのだ。

（飲み込みが早くて助かるわ。それじゃあ今度はね、マンションに戻りましょう

か。屋上なら誰も来ないだろうから訓練にもちょうど良さそうだし）

「そうだな。早く戻ろう」

空を飛ぶというのは確かに気持ち良いが、若干の恐怖もある。その上、慣れな

い力を使い続けた事と、カーラの無茶な訓練の方法によって精神は疲労し、力が

不安定になっているのだ。

「戻ったら少し休ませてくれ」

時折ふらつきながら、マンションのある方向へと飛んでいく。

（少しだけね。覚えてもらう事はまだあるし、訓練も早く終わらせたいしね）

正直言えば、今日はもう寝てしまいたかった。言っても無駄だろうという事は

分かっていたので、黙ってマンションを目指した。

空気抵抗による減速に任せて、ゆっくりと屋上に降り立った。力を使つての急

停止には、結局慣れることは出来なかった。

「疲れた……」

随分久しぶりな気がする固い地面。降り立つと同時に座ってしま

い立ち上がる

うという気にはなれなかった。
「なんでこんなに急ぐ必要があるんだ。時間が無いのは分かっているが、それに

しても無理しすぎだと思うぞ」

多少厳しいのは覚悟していたが、最初から死を覚悟する羽目になるとは思ってもしなかった。

（あのね。訓練の為とは言っても、ずっと力を使っているのよ。当然それは周囲にも知られてしまうわ。私が天使の居場所を見つけたように。あれだけ町の上空を飛び回っていたんだから、何か仕掛けたんじゃないのかと警戒されたとしてもおかしくない。むしろそれが当然と思うべきね。そうすればこの町から出て行くでしょうね）

早口で一気に言われる。こんな事も分からないのかと言わんばかりだ。カーラの精神はまだ体の中に入ったままなので、表情までは分からないが「ちょっと待て。それって本当に時間が無いんじゃないか」

（そうね。今夜辺りにでも接触しないと逃げられると思うわよ）
カーラはあっさりとしているが、かなりまずい話だと思う。それまでに殺人犯と互角に戦う力を身に付けろということなのだから。

「無理じゃないか？」

（それでもやるの）

笑顔のカーラ。だが目は笑っていない。正直言って怖い。

（もう少し休憩にしておきましょう。何か聞きたい事があるなら今のうちに聞いておいて。訓練の後じゃ疲れて話なんて出来ないかもしれないから）
そんな気遣いよりも、話が出来る程度の体力くらいは残すようにして欲しいと

思うのだが、時間が無いのはよく分かったので諦めた。

「相手はどうやって人を殺していたのか。どうせ戦う事になるんだ

ろうから、聞

いておいた方が良いと思うんだが」

相手を見つけたとしても、逆に振り返りにあつたなんて事になつたら洒落にならないだろう。

（具体的な方法は見たわけじゃないからちょっと。殺された人間は全員トラック

に撥ねられたような強い衝撃を受けて即死だったらしいけど）

トラックか。なんとなく理解は出来るが。

（力としては単純なモノね。わざわざこんな面倒な方法で殺してるから、相手は雑魚だと思っていたんだけど。実際に戦ってみると強いだよ。天使の中でも結構上位だと思うわ）

相手はなんらかの理由で面倒な殺し方を選んだ。考えられるのは体の持ち主の意思だったから。

「あとはあれか。警察がやたら早く動くのもその手口のせいかな。結構大きな音がしそうだしな」

（そうね。人の手で出来るような事でもないし、警察は躍起になつて犯人を捜し

ているみたい。相手は正体の全く分からない連続殺人犯。その上被害者の中には

結構な権力者もいたらしいから。企業のお偉いさんとか政治家とか）途中からは力とは関係の無い話だ。テレビの見過ぎだろう。

（そろそろ休憩も終わりにしましょうか。次は戦闘の為の訓練よ。気を抜いたら

殺されるかもしれないからね）

どれだけ厳しい訓練をさせられるのかと考え。少し憂鬱な気分

なった。

「最初から実戦なんて馬鹿だよな」

ふいに感じた気配。一応カーラに確認してみるが、とても嫌な予感がする。

（気付いたのね。でも仕方が無いじゃない。相手が空気を読めないんだから）

仕方が無い、とか言いながらも、その声は楽しそうだった。まあ夜に来られる

よりはましなので、諦める事にした。

「力についてはある程度指示してくれよ」

そう言ってから気配の近づいてくる方向、屋上の入り口とは反対側を見る。

突然下から飛び出してきた影。それはゆっくりと屋上へ降り立ち、

鋭い眼差し

で睨みつけてくる。

「その悪魔。大人しく捕まりなさい。抵抗すれば消すわよ」

降り立ったのは見覚えのある顔。白い天使の翼を背負った、山野美琴だった。

第9話…天使

目の前に立つ少女。いつものような明るい表情では無く、まるで親の仇でも見るような目だった。

「まさかこんな身近に犯罪者が、悪魔に魅入られた人間が居るなんてね」

目の前の少女、山野美琴は淡々と話す。

「俺も意外だ。まさかクラスメイトが襲ってくるなんてな」

冗談めかしてそう言ってみるが、山野の表情は険しいままだった。「悪魔を引き渡しなさい。そうしたらあなたの身の安全くらいは保障してあげて

もいいわ。それでも一応友達のもりでいるから」

あくまでも真剣な山野。だが、まともに相手にする気は無かった。（シン、天使に情なんてものは無いわよ。あの人間が見逃すつもりでも、実際は

どうなるか分からない。だったら戦うしかないじゃない。それに今夜の悪魔をさ
れても面白くないでしょ）

カーラに言われなくても分かっている。だからと言って、必要以上
に山野を傷
付ける必要は無いだろう。

「初めてにしては厳しい戦いだな。やるしかないだろう」

そう言って構えを取る。基本は殴り合いの喧嘩と同じだ。力の及ぶ範囲は直接

接触している場所とその周囲だけ。恐らく山野もそれほど力に慣れていないはず

だから、何とかなるはずだ。

「従う気はないのね。それなら私にも覚悟はある。あなたを傷付け

でも止めさせて貰うわ」

白い翼を羽ばたかせて宙に舞い上がる。天使の力で創ったであろうその翼は、

陽の光を受けて輝いている。

「カーラ。どうすればこちらの勝ちになる」

（殺してしまえば良いのよ。肉体が壊されれば、中に入っている精神もダメージ

を受けるわ。死ぬほどの傷を与えれば天使も消滅する）

あっさりと言ってくれるが、俺は山野を殺すつもりは無い。

「他になんとかする方法は無いのか」

「私は天使が見逃してくれるとは思わないわ。お友達が戦う事を拒否して、天使

の力を抑えてくれるなら大丈夫だと思うけど」

山野を説得しろって事か。面倒だがやるしかない。どうせ後から説明したくも

ない話だ。

「悪魔と相談事かしら。でもこっちの事も忘れないでね」

白い翼を大きく羽ばたかせ、真っ直ぐと向かってくる山野。

「悪いが相手にする気はないぞ。無駄だからな」

大きく地面を蹴ると、空中へと飛び上がる。翼を使って飛ぶ山野のゆったりと

した動きとは違い、直線的な鋭い動きだ。

「山野。お前と一緒にいる天使は何故この世界に来たんだ」

「そんなの決まっているわ。この世界の秩序を乱す悪魔を退治するためよ」

即答する山野。悪魔イコール悪という図式が完全に定着しているらしい。普通

の人間なら仕方がない事かもしれないが。

「確かに事件を引き起こす存在は居る。実際に力を使って人も殺し

ている。だが

それが悪魔だという根拠はなんだ。天使も悪魔も力そのものは同質。なら犯人は

天使でも不思議ではないだろう」

自分を追って飛び上がってくる山野。その攻撃を受け流しながら話を続ける。

「天使は秩序を守る存在よ。人殺しなんてするわけ無いじゃない」

山野の攻撃は単調だ。自分の拳を外からのダメージを受けないように力を使う

事で、一方的に殴る事が出来るらしい。決して傷付かないその拳は、最強の盾でもあった。

「その天使の言う秩序って何だ。人間のルールとは全く関係の無いものなんじゃないのか。天使も悪魔も、俺達とは価値観が全く違うんだ」

「だったら何。私が殺人犯だとも言いたいわけ」

うっかり山野の攻撃を正面から受けてしまった。力を使えばダメージを無効化

出来るのだが、タイミングが遅れたせいで吹っ飛ばされてしまう。

背中を建物の屋上へと叩きつけられた衝撃で息が詰まるが、それでも言葉を続けた。

「この世界に干渉する事を嫌うのは天使だけじゃない。悪魔も一緒だ。もしこの

世界で何かあれば調べるのは当然だよな」

実際に、カーラも今回の事件の犯人を追っている。

「そうね。私もそれに協力してここにいるわ」

空中からこっちを見下ろしながら山野は答えた。こんな状況でもちゃんと話を

聞く辺り、山野は人の良い奴だと思う。

「俺も犯人を追う側だと言ったら信じるか」

「悪魔の言う事なんて信じられるわけ無いじゃない。信じるに足る根拠を示してくれないとね」

攻撃の手を休めて話を聞いてくれるらしい。物凄く睨まれているのか分らないのが怖いけど、説得出来るチャンスがあるだけマシだろう。

「俺が犯人なら天使と悪魔の両方が追ってくるだろう。でもここに来たのは山野

一人だけ。この町のどこかにいるはずのもう一人はここへ来ない。

それはそいつ

が逃げる立場にいるから、っていうのじゃ納得できないか」

幾分か和らいだ視線。まだ警戒されてはいるが、さっきよりはマシになって

いるらしい。

「じゃあ町の上を飛び回って何をしていたの。犯人に自分の居場所を教えている

ようなものでしょ。それにあれだけ派手に動いたら警戒してこの町から出て行くでしょうね」

それはカーラにも言われていた事だ。それでも関係無い。犯人にはもう目星が

ついていて、今夜にでも会いに行くつもりなのだから。

「ただの訓練だよ。今夜に向けてのね」

「もしかして犯人の正体を知っているの」

既にこちらの無罪は確定してくれたらしい。知り合いが殺人犯だなんて思いた

くなかったのだろう。だがこの甘さは命取りになる。

「被害者は世間に悪と評されるような人間だった。そんな奴らを憎

んで、目的の

為には手段を選ばなさそうな友人がいるんだが」

俺が友人だと呼べる相手は殆どいない。山野も俺が誰の事を言っているのかに

気付いたらしいが、信じられないといった表情を浮かべている。

俺に対しては襲い掛かってきたのに、と思うと少しへこんだ。

「あいつは意外と深刻に悩んでいたよ。それでも自分一人の力では何も変えられ

ないと諦めていた。だが、そこに力を貸す天使が現れたらしい」

「天使。悪魔じゃなくて？」

（さっきから黙って聞いていれば悪魔を何だと思ってるのかしら）
頭の中にカーラの声が響いた。残念ながらその声は山野に届いていない。

「うちの悪魔が一度接触している。まず間違いないだろう」

「そんな。え。ちょっと待って」

急に山野は慌てだし、翼が強く光りだす。その光はどんどん大きくなり、山野をのみ込んだ。

「ふう。ミコトを通してでは話が進みませんね」

光が収まった時、そこには山野以外にもう一人立っていた。

金髪の美しい青年。山野にあった翼も、今は青年の背で淡い光を発している。

「はじめまして。僕の名前はジェイン。見ての通り天使です」

丁寧な挨拶をして頭を下げる。もっと冷たい印象かと思ったのだが、この天使

は優しい笑顔を浮かべていた。

「ちょっと。何で勝手に出てきてるのよ」

山野が騒いでいるが無視する。

（私も外に出て挨拶するべきかしら）

夜の事を考えると、無駄に力を使っている場合ではない。挨拶の

為だけに体を

構築しなოსなんて問題外だろう。頭の中でカーラに伝え、ジェインと名乗った

天使と向き合う。

「それで。心当たりというのは。本当に犯人で間違い無いのでしょうか」

「どうやらこいつは天使が犯人でも驚かないらしい。話が早くて助かる。」

「こっちの悪魔が色々調べていてな。犯人の手口を聞いた。全員トラックにでも撥ねられたような衝撃を受けて死んでいたらしい」

「それが何か？」

ジェインが疑問に思うのは当然だろう。だが山野は違う。シヨックで固まってしまっていた。

「さっき言った心当たり。その人物は交通事故で親友を亡くしている。車に轢か

れたんだよ。運転手は酒に酔った上に赤信号で突っ込んできた」

「それで悪を憎むようになった、という事ですか。事件もその時の復讐のつもり

なんでしょうかね」

「ちよつとだけ違う。その運転手はどっかのお偉いさんの息子らしくてな。父親

が身代わりを立てたんだ。後になってから金を持って謝罪に来たらしいが、それを聞いて余計許せなくなっただろう」

事故を起こした事よりも、自分で責任を取らずに金で解決しようとした事が許せなかったのだ。

「川島君。あいつの事説得できると思う？」

悲痛な面持ちで聞いてくる山野。説得できなければ力で止めるしかない。最悪

の場合殺す事も覚悟しなければならない。

「大丈夫だ」

安心させるように笑顔を見せながら山野へと近づく。

「本当？私は友達を殺したくなんっ……」

言葉を途中で詰まらせて倒れる山野。腹部には拳がめり込んでいる。

「止めないんですね」

力なく倒れる山野。

その隣で平然とした顔で立っているジェインを見る。

「仕方が無い事です。あなたと戦ってみてよく分かりましたが、ミコトには覚悟

が足りません。相手が友人だというならば、足を引っ張るだけでしよう」

（天使にしては話が分かるわね）

どうやらここにいる全員が山野は足手まといだと判断したらしい。

「それで、これからどうするんだ」

ジェインは協力者を失う事になる。そうなれば戦いに参加する事は難しくなる

だろう。

「私は元々戦闘には向いていないんですよ。力も弱い方ですしね。

その代わりに

気配を隠すのも探るのも得意ですから」

「それなら夜になるまで町の監視を。出来ればこちらは休ませて貰いたいんだが

大丈夫か」

慣れない事をして精神的に疲れていた。戦闘に関しては明らかに訓練不足なの

だが、無理をして本番に影響が出たら意味が無い。

「任せておいて下さい。その代わりそちらも仕事はしっかりして下さい」

ジェインは倒れている山野を抱き起こし、膝枕をしている。流石にいつまでも

放っておくのは良くないと思ったのだろう。

「そうだ。まだそちらの名前を聞いていませんでしたね」

「俺の名前は川島真。悪魔の方はカーラだ」

(……)

特に考えずに答えてしまったが、カーラは黙っている。少しだけ不機嫌そうな

感じが伝わってくるが。

「……そうですか。それではお二人とも、よろしくお願いしますね」
一瞬だけジェインが驚いたような表情を浮かべていた気がしたが、次の瞬間に

は穏やかな笑みを浮かべていた。

第10話：道化

燃えるような赤色に染められた風景。もう少しで太陽は沈み、町は闇に包まれるだろう。

穏やかな風が吹いていた。

「ちょっと話があるんだけどいいかしら」

声を掛けられ、そこに座っていた天使は首だけで後ろを振り返った。

そこに居たのは、まるで着せ替え人形の様な姿をした小さな悪魔だった。

「これはまた随分と可愛らしいお姿ですね」

嫌味とも取れる様な言葉を天使、ジェインは言い、笑顔に向けてきた。

「仕方が無いでしょう。今は余計な力を使える時ではないから。話さえちゃんと出来れば良いわ」

「確かにそうですね。ではちゃんと話をする為にこちらへ来ていただけですか。」

この格好では首を痛めてしまいます」

確かにジェインは首だけを捻ってこちらを見ていた。

それを見て小さな悪魔、カーラは体ごとこちらを向けば済む話じゃないのかと

思うが、ジェインが膝で眠る少女を指差し、困ったような笑いを浮かべるのを見て納得した。

「まだ目を覚まさないのか」

「仕方ありません。ミコトも、ここ数日はあまり休めなかったみたいですから」

そう言いながら、ジェインは膝の上の少女の頭を優しく撫でている。まるで猫

でも膝に抱いているかのようにだ。

カーラも優しい眼差しでそれを眺めている。

「ところで私に話とは何でしょうか」

一瞬だけ逡巡し、カーラは言葉を発する。

「今回の件。どの天使が事件を起こしたのかあなたは知っているわね」

「そうですね」

はつきりと即答したジェイン。既に先程までの優しげな雰囲気は無い。

「黙って放置していたのは何故かしら」

対象の天使が特定できているなら、どの人間と共に行動しているのかくらは知っていないもおかしくは無い。

「監視はちゃんとしていましたよ。わざわざ止めなければいけないほどの行動はまだしていませんでした」

ジェインには全く悪びれた様子は無かった。

「言っておきますがこれは天使側の総意。人間に協力をする事と、事件の影響が

大きくなるまでは直接手を出さない事とを言い渡されていましたが」

天使らしいと言えば天使らしい。この世界の秩序を乱すような事は許すつもり

は無いが、そうでなければ積極的に関わろうとはしない。

「面倒な指示ね。人間に協力しろだなんて」

「全ては我らが神の意思。それにあなたも人間と共に動いているでしょう」

ジェインの言葉には一切迷いが無かった。神に対する忠誠心とい

うやつなのだ
ろう。

「私はあいつが好きじゃないからね。最低限のルールは守るけど、面倒な指示にまで従う気は無いわ。シンと一緒にいるのは私自身の意思。なかなか面白そうな人間だったから少し興味が湧いただけよ」

カーラの言葉に、ジェインは呆れた様に溜息を吐く。

「あなただって気付いているんでしょう。私達が彼等と関わっているのも全ては神の意思。定められた運命。そもそもこの世界へと来る原因を作った天使さえも、神の手の上で踊らされているだけなのですから」

ジェインはこの世界に興味を持つとうとしていない。神の定めたシナリオには逆
らえない。自分の意思など無意味だと諦めているのだ。

「それでも私は自分自身が決めた、自分の意思だと思っている。神の力を良く知るあなたに言っても無駄でしょうけどね」

ジェインを見るカーラの瞳には、憐れみが映っていた。

「ちよっと話がそれたわね。聞きたかったのはもっと別の事。あなたは事件を起

こした天使を処分する気はあるのかどうかを確認したかったのよ」

カーラは、ジェインが犯人を知っている事は予想していた。その上で、悪魔であるカーラを襲ったのだから、本気で犯人を追う気があるとは思えない。

「彼が町を出る時には動きますよ。あんな格下の天使など、人間の協力無しでも

対処出来るでしょう。私はあなたと違って力の封印を受けていませ

んから」

「そう。それを聞いて安心したわ。恐らくシンの力じゃ天使に止めを刺すことは出来ないだろうから」

カーラは屋上の入り口へ向かって歩き出す。

「待ってください」

ジェインがそれ呼び止めた。

「物語の結末は既に決められているのです。あの少年は自らの衝動を抑えられずに、友人の体を貫く。その直前に天使はその場から逃げ出し、私が止めを刺す事になるでしょう」

まるで実際に見てきたように語るジェイン。それを、カーラは退屈そうに聞いていた。

「相変わらず悪趣味ね。所詮は実験の道具って事かしら。彼らも」

「そうです。この世界で育った、人間という生き物の心を見ている為に今回の件は仕組まれたのでしょう」

神という存在は残酷だった。

不完全な世界は変化を続ける。そうすればいつの日か、神ですら知りえぬ何か

が生まれるかもしれない。その為だけに神はこの世界を創り、そこに生きる存在を弄び続けるのだ。

「あなたがどうしようと結末は変わらないでしょう。余計な事など考えずに、神

のシナリオを受け入れればいいのですよ」

ジェインが真剣に語るほど、カーラの表情は曇っていく。

「ここまで来ると可哀想になってくるわね。これじゃあ神の望みが

叶う事は永遠

に無さそうだし」

「神の望み？それは一体何なのですか」

少しだけ悩んだような素振りを見せてからカーラは答えた。

「待っているのよ。定められた未来を覆してくれる存在を」

未来を変える。

果たしてそんな事が可能なのか。

カーラが中へと戻った後、ジェインは一人で考えていた。

所詮世界は神が戯れに創ったに過ぎない。この世界も。天使の住む世界も。悪

魔の住む世界も含めた全ての世界がだ。

そこに生きる存在もまた、神に与えられた役割を果たすだけの道化にしか過ぎ

ないのだと諦めていた。

そもそも、神に逆らおうとなど考えた事も無かったのだが。

もうすぐ完全に陽が沈もうかという頃、ジェインの膝の上で何かが動いた。

「ミコト。ようやく目を覚ましたのですね」

自分がジェインの膝の上で眠っていた事に気づき、美琴は慌てて起き上がる。

「ちょっ……なんで私……」

状況が分からずに混乱する美琴。相手は人間では無いとは言え、見た目だけな

ら美しい青年。顔を真っ赤に染めながら、頭の中を整理している。

「そうだ。川島君は」

ようやく何があったか思い出たのだろう。慌てた様子でジェインに訊ねる。

「彼ならまだ眠っているんじゃないですか。動くならもう少し遅い

時間になって

からでしょうし、それまではゆっくりと体を休めておくべきですかね」

「そう……ね」

悲しげに目を伏せる美琴。

もうすぐ友人の一人を失ってしまうかもしれないからだ。

「ミコトはどうしますか。彼と一緒に行くのか。それともただ待つのか」

「……」

ミコトには答えられない。

だが、ジェインには分かっていた。ミコトは一緒には行けないだろう。友人と

戦うことは選べない。選ばざっと殺し合いになる。そんな事になれば耐えられないからだ。

「無理をしなくても結構ですよ。私一人でも手伝えることはありませんから」

静かに頷く美琴。

それを見てジェインは改めて思った。所詮定められた未来を変えることなんて

出来はしないのだと。

悲劇をもってこの物語は終わる。それが神のシナリオだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0885e/>

悪魔の微笑み

2010年10月28日07時26分発行